

別海町歴史文化遺産「旧浜中町営軌道東円線（簡易軌道茶内支線）上風蓮（開南）停留所」について

令和4年12月 別海町郷土資料館

1 物件の概要

本物件は、1965（昭和40）年12月に浜中町営軌道東円線の終点として、現在の上風連開南地区に設置され、1971（昭和46）年5月に運行が休止された停留所の跡である。待合室とトイレの基礎が残り、転車台の一部が現存する。別海町上風連251番49に所在する。

停留所としての正式な名称は「上風蓮」であるが、別海村営軌道風蓮線の上風蓮停留所との区別をつけるため、また、この停留所が開南地区の歴史と深く結びついているため、「上風蓮（開南）停留所」を歴史文化遺産の名称とした。



写真1 旧浜中町営軌道東円線上風蓮（開南）停留所現況

2 上風蓮（開南）停留所設置の経緯

上風連開南地区は別海町の最南端にあり、浜中町北部と隣接していることから（図1参照）、1932（昭和7）年の入殖開始以降、特に国鉄駅のある浜中村茶内市街との交流が深かった。各農家から出荷する生乳も、上風蓮の集乳所だけでなく、浜中村の西円朱別と東円朱別の集乳所にも運ばれ、それぞれの集乳所から馬力線の軌道を使って工場に運ばれていた。

1957（昭和32）年から浜中村の馬力線軌道が順次動力化されていった。1957年に茶内～中茶内間が、1958（昭和33）年に中茶内～西円朱別間が、1962（昭和37）年に秩父内～東円朱別間の動力化が完了した。

1965（昭和40）年、浜中町営軌道東円線（正式な路線名は「茶内支線」）東円朱別～上風蓮（開南）間が町村境を越えて延伸新設された（図1参照）。開南では、戦前の1939（昭和14）年に殖民軌道敷設の請願運動を行っており（開南五十周年記念協賛会 1982.:16、184）、四半世紀を経てその悲願が達成されたのであった。

開南まで伸ばすには、ノコベリベツ川を渡る軌道橋の新設など多額の工事費がかかり、町村境を超えての延伸実現には大きなハードルがあったと思われる。開南の中心人物であった瀬下健二郎氏は、1958年から北海道開発局や道庁に陳情を行うなど極めて熱心に開南延伸のために奔走し、浜中町農協組合長で道議会議員も務めた二瓶栄吾氏の後押しもあって、開南への延伸実現に至ったと伝えられる。



写真2 上風蓮（開南）停留所（1970年6月）
（田沼建治氏撮影）

3 開通後の状況と廃止に至る経緯

開南への延伸完了は、10年に及ぶ浜中町営軌道工事の完成でもあり、1965年12月10日に浜中町茶内で完工式が開かれた。当時の新聞は、その時の開南の人たちの様子を、「旗をふり歓声をあげて喜ぶ子ら、祝い酒をついでまわる農家の人たち。部落をあげてのにぎやかな歓迎ぶり」と伝えた（北海道新聞 1965）。

1968（昭和43）年の時刻表によれば（石川ほか 2018：83）、東円線は1日往復6本運行され、そのうち客車が3本、学校が休みの日は運休となる通学車が1本（開南には停車せず）、貨物車が2本であった。開南から茶内停留所まで、客車であれば乗車時間は約40分であった。開南8時発茶内9時15分着の上り貨物車で集乳缶を集荷し、茶内10時30分発開南11時45分着の下り貨物車で空缶を返送した。

この延伸により、「週に1回茶内へ買い物に行けるようになり、生活が一変した。店が1軒もない開南の生活が不便とは感じなくなった。」と当時開南小学校の新任教員であった戸田静子氏は回想している（2022年9月28日聞き取り）。茶内で国鉄に乗り換えて、釧路や根室に行くことができることも大きな魅力であった。

一方で、生乳の運搬は確かにこの軌道も使われたが、道路事情もよくなってトラックによる戸別集荷も可能になってきており、バスの運行や自家用車の普及で軌道利用者も減少したことから、簡易軌道自体の必要性が急速に失われつつあった。

1970（昭和45）年度をもって簡易軌道整備事業への国庫補助が打ち切れ、別海村を含む簡易軌道を有する町村は、軌道廃止へと進んでいく。浜中町営軌道全線廃止の1年前の1971（昭和46）年5月、日向前～上風蓮（開南）間が運行休止となった。軌道経営が赤字の中、開南への運行費用を浜中町が負担していることが浜中町議会で問題視されたことが後押しとなり（石川ほか 2018：79、佐々木 2018：161）、喜びの完工式からわずか5年あまりで悲しい結末を迎えた。

4 上風蓮（開南）停留所の歴史発掘の経緯と現況について

元雪印メグミルク株式会社別海工場の工場長であった佐々木正巳氏は、開南地区の人たちと交流する機会を得て、2011（平成22）年頃から開南地区の歴史を熱心に調べるようになり、繰り返し現地を訪れて当時を知る関係者からの聞き取り調査を重ねていった。開南地区の人たちも、その熱意に応じて、積極的に聞き取り調査に協力した。その調査の成果は地元開南の人たちに発表され、さらに2017（平成29）年1月14日には釧路市立博物館において佐々木氏の講演会が開かれて調査の成果が発表されるなど、町外からも注目を集めた。

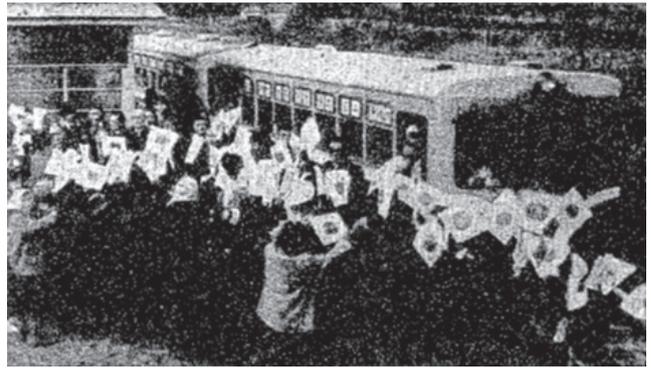


写真3 完工式時の上風蓮（開南）停留所
（北海道新聞釧路版 1965年12月12日掲載）



写真4 2022年9月9日発掘調査時写真
（佐々木正巳氏提供）

停留所のあった場所では、線路敷地の跡や待合室とトイレの基礎の一部が確認できる。また、2022（令和4）年9月9日に佐々木氏と地元開南の人たちが発掘調査を行った結果、転車台の一部が地中に埋まっていることも確認された（写真4参照）。

本物件の歴史的な価値もさることながら、忘れ去られようとしていた開南の簡易軌道の歴史に佐々木氏の調査がきっかけとなって光が当てられ、共鳴した地元の人たちとの共同作業によって歴史が掘り起こされるに至る過程にこそ、本物件の歴史文化遺産としての価値の高さが認められる。

参考文献等

- 別海村営軌道聞き取り調査録音テープ(1995)、別海町郷土資料館所蔵（電腦工房デジタル版）。
- 北海道新聞(1965):「できたぞ原野の足 浜中町営簡易軌道喜びの完工式」(1965年12月12日付 釧路面)。
- 石川孝織・奥山道紀・清水一史・星匠編著(2018):『釧路・根室の簡易軌道』[増補改訂版]、釧路市立博物館。
- 開南五十周年記念協賛会(1982):『開南五十年史』。
- 釧路新聞(2022):「半世紀前の転車台発掘」(2022年9月27日付 根室版)。
- 佐々木正巳(2018):「『乳の道』浜中町簡易軌道と地域酪農の発展」、石川ほか(2018)、157～161頁。
- 田沼建治(2009):『幻の北海道殖民軌道を訪ねる 還暦サラリーマン北の大地でペダルを漕ぐ』、交通新聞社。

謝辞

本稿の執筆に当たり、佐々木正巳氏と釧路市立博物館の石川孝織学芸員から内容に関するご教示を頂きました。ここに記して感謝いたします。

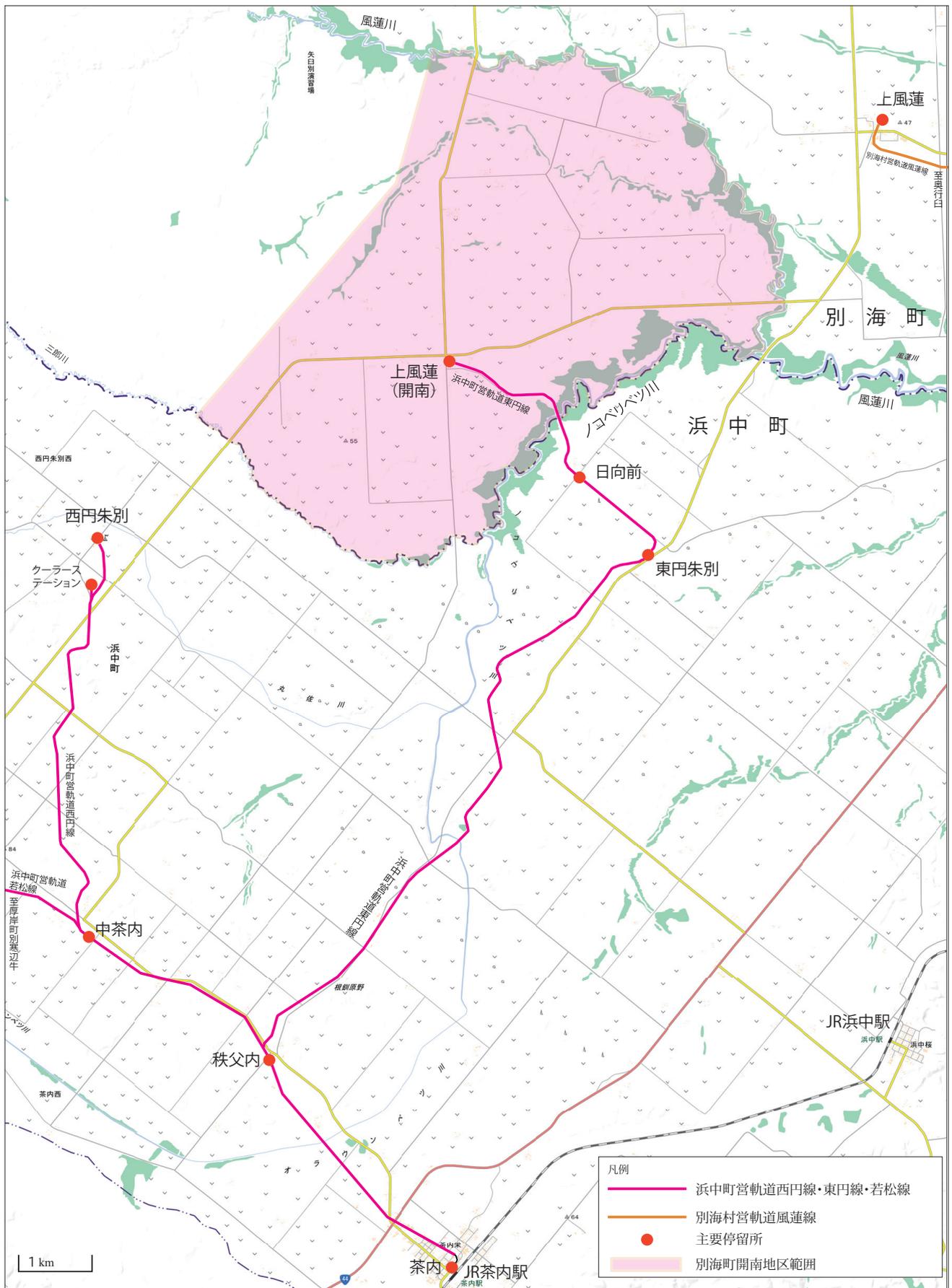


図1 浜中町営軌道東門線等位置図

石川ほか（2018：80-81、118）及び地理院タイル（<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>）を基に作成。